ギリギリセーフ

小樽市医師会
大倉山学院
出店（でみせ）　正隆（まさたか）

最近表題のようなお笑いのネタが流行っているようですが、自分の半生を振り返ってみると、いろいろ「ギリギリセーフ」なことがありました。

その１）
小学低学年の頃、家族で有珠山（噴火前）に登った時、崖っぷちで記念写真を撮るのに父親から「そこにしゃがみなさい」と言われしゃがもうとしたら、体が硬いボクはそのまま後ろに引っくり返り、断崖絶壁から転落しそうになるも、父が駆け寄って支えてくれてギリギリセーフ。

その２）
小学高学年の冬、凍結防止のためトイレにルンペンストーブ（死語）の中身（内筒）を置いていた。用をたした後、ボクは一酸化炭素中毒で気を失いそのまま後ろに転落（一段上がってしゃがむタイプのトイレ）。咄嗟に異変に気づいた母が助けてくれてギリギリセーフ！・・・って今考えたら完ペキに親の大バカ行為じゃねーか！

その３）
医者になって３年ほど経った頃、当時で言う「Non-A non-B 肝炎」に罹った。GPTは４桁。「劇症一歩手前」と言われ、「強ミノＣ大量療法」というのを受けたが症状は遷延。このまま肝硬変、肝癌への道かと観念しかけた矢先、大学でインターフェロンの治験が始まるが受けてみるかと主治医。藁にもすがる思いで受けた治療が見事に著効し肝機能は見る見る正常化、ウイルスは消失。医学の進歩のおかげでギリギリセーフ。

その４）
平成某年、精神保健指定医の５年に１度の更新をすっかり忘れていて敢えなく失効。「オレの精神科医生命は終わった…」と絶望したが、その数年前に厚労省で「指定医の確保について。失念等により指定医資格の更新期限を超えた場合について、運転免許と同様、再取得の際に一定の配慮を行うこととしてはどうか」という議論があり、失効後１年以内は救済措置が受けられるようになっていたことが判明。大至急手続きし、東京で講習を受け、ギリギリセーフ！

他、ここには書けないようなやばいギリギリセーフ多数。おかげさまでこうして還暦過ぎまで無事生きてますとさ。

学びの機会を得て

旭川市医師会
旭川リハビリテーション病院
黒島（くろしま）　研美（きよみ）

私が臨床研修指導医養成講習会に参加したのは平成22年です。当時の勤務先は臨床研修病院で、平成16年から始まった臨床研修制度のもと研修医を受け入れていました。大学から離れて長く、また自分の受けた卒前・卒後教育から大きく制度が変わったために、特に研修医の話す卒前教育に関するさまざまな用語は恥ずかしながら意味不明で、講習会に参加してようやく卒前教育から臨床研修制度の概要を理解できたことを覚えています。講習会参加後、講習会世話人（タスクフォース）としての参加のお誘いをいただき、現在の勤務先に移った後もそのご縁で講習会への参加は続いています。参加することでさまざまな学びがあり、自分自身の臨床へ向かう姿勢が変わったことは大きな収穫であったと感じています。感銘を受けた言葉も数々ありますが、その中に「教育とは学習者の行動に価値ある変化をもたらすプロセスである」という一文があります。ここでの学習（修）者は医学生や研修医ですが、私たちが日常よく使う「患者教育」という言葉もまさにこれで、患者さんが自分の病気と向き合うとき、病気と共に生きていくときにその行動に価値ある変化をもたらすプロセスと言い換えることができるのかもしれないと感じました。この一文は昭和53年に発行された「医学教育マニュアル・１.医学教育の原理と進め方」に書かれており、医学教育に携わってきた先人はその時代すでにこのような信念に基づいて私たちの教育の基盤を作ってきてくれたのか、と感動したことを覚えています。

臨床研修病院を離れて３年が過ぎ、研修医教育の現場の空気を感じづらい中で講習会への参加を続けていますが、参加者から学ぶことも多く、自身の成長にもつながる活動を、今後も続けられればと考えています。

最後に、講習会参加のために勤務先の病院を留守にすることについて、御理解・御許可をいただいている病院長とその間の業務をカバーしていただいている当院の先生方に心からの感謝を申し上げます。